

令和 4 年 6 月 25 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02287

研究課題名（和文）近代日本における新興演劇の演出に関する研究 新派の音楽演出を中心に

研究課題名（英文）Study on the Direction of Emerging Theatre in modern Japan: focusing on the musical direction of shin-pa theatre

研究代表者

土田 牧子 (Tsuchida, Makiko)

共立女子大学・文芸学部・准教授

研究者番号：30466958

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は新派を対象に音楽演出の確立過程を解明することを目的とした。(1)まず中村兵藏旧蔵付帳（音楽資料）のデータベース作成により研究基盤を築いた。(2)次に時代ごとの音楽分析により次のことを明らかにした。川上音二郎が活動を始めた草創期、当初は多分に歌舞伎的だった音楽演出が、短期間の内に効果音を主体とするリアルな音楽演出を追求するようになった実態、家庭小説の劇化で新派が黄金時代を築いた明治～大正期には、早い段階から音楽演出が練り上げられていたこと、効果音が情景や人物の心情をも描写する手法に新派の独自性の確立が見出せること、戦後には時代に合わせた音を非常に繊細に形成してきたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の近代日本演劇研究において新派が様々な方面で注目されている状況を踏まえ、本研究では新派の音楽演出の確立過程や特徴を探った。新派自体が非常に多岐にわたる演劇であるため、全貌の解明にはまだほど遠いが、川上音二郎の初期の演劇における新派らしい音楽演出の芽生え、家庭小説の劇化作品にみる音楽演出確立の過程、そして戦後の新派を支えた繊細な音楽演出の実態を、ある程度具体的に明らかにすることができた。旧さと新しさの両方を兼ね備える新派の音楽演出の歩みは、近代日本の歩みとも呼応するものであることから、本研究が近代日本文化の本質の追求に何らかの形で寄与できるのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to clarify the process of establishing music direction for the Shimpa theatre, literally, the new school. (1)First, a database of Nakamura Hyozo's former collection of music materials was created to lay the foundations for the research. (2)Next, the following was clarified; In the pioneering period when Kawakami Otojiro began his career, music direction, which at the outset was probably Kabuki-like, quickly became a pursuit of realistic music direction with sound effects as the main element; In the Meiji and Taisho periods when the shimpa established its golden age by dramatising family novels, music direction was elaborated from an early stage, and sound effects played a role to depict scenes and characters' emotions. The establishment of the originality of the shimpa's own musical direction can be seen in this period. Even after the war, the musical direction in Shimpa was very delicately devised and changed to fit the times.

研究分野：日本音楽史

キーワード：新派 音楽演出 新興演劇 近代日本 黒御簾音楽

1. 研究開始当初の背景

新派(新派劇)は、歌舞伎(=旧派)に対する新興演劇として起こり、明治期から戦後まで長きにわたって人気を博した演劇のひとつである。伝統と近代の狭間にある演劇にこそ庶民が心の拠り所とした本当の「近代」の姿があるという認識から、大衆の人気を集めた新興演劇に関する研究成果が、近年次々と発表されつつある。研究開始時にはすでに、新派とそれを取り巻く劇壇の歴史や人物に関わる研究は大きく前進しつつあったと言ってよいだろう(今なお、研究の進展は続いている)。しかし、実際の新派の演出面に触れた研究は少なく、舞台作品としての新派が観客にどのように訴えてきたかという点の解明が残されていた。とりわけ、新派にとって重要である音楽演出についての言及はほとんど見当たらなかった。本研究はこのような状況を踏まえ、新派の実態や特殊性を音楽演出の面から捉えようとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代の新興演劇として重要な位置にある新派を対象に、その音楽演出の確立過程を、音楽分析により解明することにある。

具体的な目的としては、下記の方法に記すように、(1)四代目中村兵藏旧蔵の新派付帳コレクションを整理してデータベース化すること、(2)新派の歩みを三つの時代に分け、付帳、新聞、雑誌の記録を資料として音楽演出を分析することで、新派の音楽演出がどのように独自性を確立していったかを明らかにすることを掲げた。

3. 研究の方法

(1) 資料整理

本研究では、堅田喜三代家に所蔵される四代目中村兵藏旧蔵の新派付帳コレクションを主要資料と位置づけ、資料整理を進める(付帳とは、舞台進行に即して音楽演出を記した演奏家の覚書(音楽台本)である)。本研究ではこの付帳コレクションの重要性に鑑み、本コレクションの資料整理を基礎研究として最初の目的に掲げた。この資料整理により、戦後の新派の音楽演出の実態が詳細に把握できることとなる。

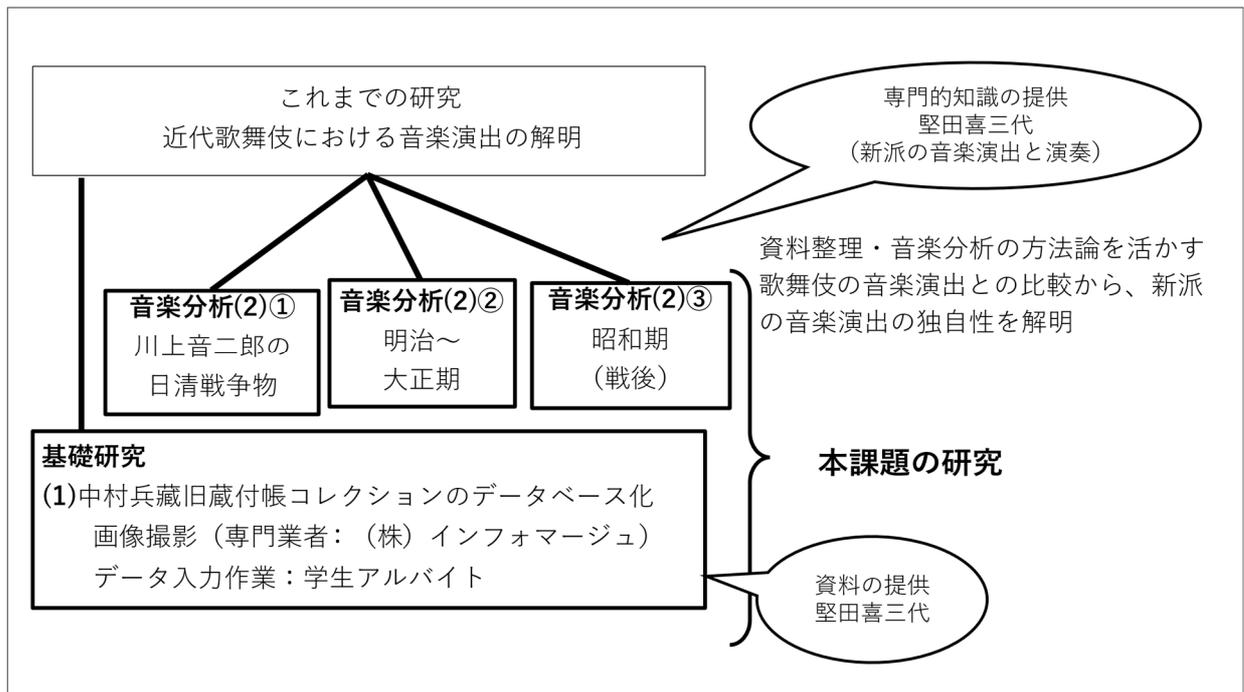
(2) 音楽分析

音楽分析は3つの時代に分けて、それぞれ行う。

：新派の祖とされる川上音二郎が日清戦争をリアルに描写して、人気を博したことはよく知られるが、そこには歌舞伎にはない新奇性と歌舞伎を踏襲した親しみ易さとが共存していたと言われる。それを踏まえ、音二郎の日清戦争劇における音楽演出の特徴を台帳を主要資料として探り、それ以前の川上演劇とも比較しながら、その特殊性を読み解く。

：新派に全盛期を招来した新聞小説の劇化作品を対象とし、特に徳富蘆花原作の『不如帰』をとりあげる。ここには、新派独自の音楽演出を模索し確立していく変遷の過程を見ることが出来る。文学方面の先行研究(関肇『新聞小説の時代 メディア・読者・メロドラマ』2007など)も視野に入れながら分析を行い、昭和期の付帳分析につなげる。

：昭和になると、 の作品群が古典となってますます上演を重ね、加えて久保田万太郎、川口松太郎、北條秀司といった作家たちが新派において大きな位置を占めてくる。分析の対象は、 の作品群のひとつである『婦系図』を中心とし、北條作品についても考察を加える。当初は戦前期を対象とする予定であったが、付帳の年代などを考慮し、戦後の新派に光を当てることとした。



【図1】「当該研究の研究方法のイメージ」

4. 研究成果

(1) 資料整理

堅田喜三代師所蔵の「四代目中村兵藏旧蔵新派付帳コレクション」(以下、兵藏付帳)についてデータベースを作成した。データベース化の作業については、中村ひかる氏(当時、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程在学・現在、松竹株式会社勤務)の協力を得た。データベース化により、兵藏自身より1番から106番までに整理された本コレクションには付録、別冊などを含めて135冊、580作品の多彩な作品が収録されていることが分かった。戦後の新派の実態を音楽面から把握するには不可欠な資料群であることが改めて確認されたと言えよう。

(2) 音楽分析

新派草創期：

明治23(1890)年の川上音二郎の東京進出から、日清戦争劇が成功した明治27~28年の間に川上の芝居で上演された作品の中から5作品を選び、台帳を主要資料としてその音楽演出の特徴を探った。

その結果、日清戦争劇以前の川上演劇では、効果音的な黒御簾音楽だけでなく、いわゆる聞かせるセリフに合方をつける例が多数見られ、独吟、唄浄瑠璃を含めて多分に歌舞伎的で多様な音楽演出を見ることができた。また、竹本の使用も多く、愁嘆場に用いるなど、その使い方は極めてオーソドックスである。ただし、場面により音楽の使用量にはばらつきがあり、比較的初期から音楽演出をあまり多用せずにリアルにセリフを聞かせる場面を設定し

ていたことが窺われる。

他方、日清戦争劇の時代になると、黒御簾音楽の使用はあるものの、効果音的な使用が目立つ。戦争の描写も、初期は 風音 と ドンチャン を用いていて古典の歌舞伎作品と変わらないのに対し、近代戦争の描写として 喇叭 を用いるようになり、日清戦争劇になると 砲声 や 大砲、軍楽 などのリアルなものを好んで用いるようになる。その一方で、幕明にはほとんどの場合、何らかの囃子を付しており、自然現象の音を中心に旧来手法も使われている。幕切も多くに「木頭」が入っていて、まだ旧劇の伝統を踏襲している様子が窺える（もっとも、昭和 52 年の『不如帰』でも柝は使用しているので、単純に年代では比べられない）。川上演劇では立廻りの場面が多くみられるが、台帳で確認する限り、立廻り用の合方の使用は認められず、立廻りについては早い段階から歌舞伎からの脱却を図っていた可能性がある。いずれにせよ、この間の音楽演出の変化を、川上の芝居が歌舞伎的なものから脱却していく様相の一側面として捉えられると考えられる。

明治末～大正期

『不如帰』の「逗子海岸」の場について、明治 34 年の初演から柳川春葉の脚本『不如帰』が刊行されるまでの音楽演出を検証した。柳川春葉の脚本は並木萍水が脚本を手掛けた初演を下敷きにしており、初演から踏襲されていた演出もあった。とりわけ、喜多村緑郎が浪子を演じた公演ではそれが当てはまる。しかし、その間に浪子を演じた数々の役者たちはそれぞれに演出を工夫し、いくつかのヴァリエーションがあった。また、柳川春葉脚本にあって現行にはない音楽演出も認められた。それがいつ頃どのような経緯で行われなくなっていったのかという点は未だ解明できていない。

現行（昭和 52 年 10 月国立劇場）の上演では、この「逗子海岸」以外にも、浪子を見舞った武男の同僚の妹たちが箏を弾く「逗子の別荘」の場、大詰「青山墓地」の場の幕切で日本歌曲《ふるさとの》のメロディーを聞かせる笛など、印象的な音楽演出を見ることができる。特に後者は、登場人物には聞こえていない音であるところが新派の音楽演出としては珍しいと言えるだろう。この演出は柳川春葉脚本には見られないことから、いつ頃どのように作られたものなのか。「逗子海岸」の場以外の音楽演出の変遷と確立過程については、今後の課題としたい。

昭和期

ここでは、昭和期における『婦系図』『柳橋柏家』の音楽演出の変遷を追うことで、新派の音が時代に合わせて変わっていく様を明らかにした。また『婦系図』と併せて、昭和期の新派を支えた北條秀司の作品にも少し検証を加えた。

『婦系図』『柳橋柏家』では、櫓の音 の効果音と他所事浄瑠璃的に使われる小唄が、この場の情景と人物の状況や心情を描出していた。新派の音楽演出は、この効果音と「他所事的」というところに一つの特徴を見出せるのではないかと結論付けた。昭和を舞台とする北條作品では、櫓の音 がポンポン船の ストンポッチ へ、人力車や列車の音は車の音へと変わり、義太夫の流しもアコーディオンとギターの流れへと変化していた。しかし、これらも単なる効果音ではなく、舞台の情景やその場の状況、登場人物のセリフと相俟って大きな効果を生み出すよう、緻密に計算されていることが、改めて確認された。

以上の ~ の音楽分析により、新派という演劇の音楽演出の特徴のひとつを「他所事的」として捉えられると考えた。この場合の「他所事的」とは、歌舞伎の「他所事浄瑠璃」に見られる演出効果を浄瑠璃以外の音楽や音響効果にも広げたものと定義づけたい。そして、この「他所事的」な新派の音楽演出は、観客と記憶を共有するという歌舞伎的な手法と、リアルを追究する近代劇の目指すものが出会ったところに生じる特徴と言えるのではないかと考えた。そしてそれは新派そのものの位置付けでもあり、また近代日本文化の一端を垣間見ることのできるものではないだろうか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 土田牧子	4. 巻 43
2. 論文標題 劇音楽の表現 歌舞伎と新演劇の日清戦争劇を例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学藝術	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 土田牧子
2. 発表標題 川上音二郎の初期作品における音楽演出について
3. 学会等名 東洋音楽学会東日本支部第118回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 土田牧子
2. 発表標題 昭和初期東京の小芝居における演出 杵屋花叟旧蔵付帳を資料として
3. 学会等名 歌舞伎学会秋季大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館監修、後藤隆基、柴田康太郎、児玉竜一、神山彰、土田牧子、原田真澄著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	5. 総ページ数 144
3. 書名 新派 SHIMPA アヴァンギャルド演劇の水脈	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------